

大学生の日本語能力試験成績と日本語カリキュラム教育

との相関関係についての研究

惠州学院 陳素玲*

惠州学院 康伝金

惠州学院 郭雅琴

要旨

大学生個人間の成績の差や日本語本科基礎段階における第二学年の日本語聴力、日本語会話、基礎英語などのカリキュラムは大学生が受験した日本語能力試験N1の成績と相関性が認められる。日本語能力試験N1の成績を全体に上げるには、学生の個人差を重視し、そしていくつか相応の教学改革を実施し、教育効果と専門科目の試験を考察すべきである。さらに学生にしっかりと日本語の言語の基礎知識を備えさせ、日本語聴力能力、日本語読解の技能、日本語言語応用の総合能力を確保すべきである。

キーワード: 日本語能力試験成績 日本語カリキュラム教育 相関関係

はじめに

日本語能力試験は日本語を母語としない学習者の日本語能力を測定し認定する試験として、日本国際交流基金と日本国際教育協会が1984年に開始した。受験者数は1984年の7,019人（そのなか：N1は2,314人）から2013年の572,075人（そのなか：N1は125,897人）に増え、世界最大規模の日本語試験となっている。社会の多様なニーズを応えるには、日本国際交流基金と日本国際教育協会は、日本語試験の内容を改定し2010年7月から新しい日本語能力試験を実施することとした。要求として、社会生活をする上で、必要な、総合的な日本語能力が必要、より幅広場面で使われる日本語を理解することができる。

惠州学院日本語科の大学本科学生を対象にしたアンケートの調査では、「一部分の学生が日本語能力試験N1を受験するには、テキストを無視し、問題集を通じて日本語を勉強していた。そして、日本語能力試験N1の証明書取得だけを目的とし、毎日、熱心に各種の模擬問題の解答に忙しく、貴重な日本語授業にぼんやりし、うわの空で敷衍する。また、日本語能力試験N1を合格したが、日本語の実際の応用能力は非常に限られ、日本語でコミュニケーションすることはなかなかできない」などということがわかった。

そこで本稿では、上述の問題を踏まえて、惠州学院日本語を専攻している2011年に入学した本科大学生を対象に、日本語能力試験N1に受験し合格した大学生の成績と大学基礎段階に開設した専門カリキュラム教育との相関性を検討する。統計分析を通じて、日本語教育活動のコア、すなわち基礎段階で開設したカリキュラム教育は日本語能力試験の成績への影響、日本語能力試験の成績とどのような相関関係があるか、主要要因を探り出し、新しい情勢の変化に適応する合理的な教育のモードを構築することに一助とする。

陳素玲：中国広東省惠州学院外国語系大学生

康伝金：中国広東省惠州学院外国語系教師

郭雅琴：中国広東省惠州学院外国語系教師

1 基礎段階専門カリキュラム及び日本語能力試験1級

1.1 基礎段階専門カリキュラム及び成績

惠州市は中国珠江デルタ中核都市の一つであり、香港、広州、深セン、東莞など経済発展都市に隣接し、近年の経済発展スピードは広東省のトップクラスに入り、経済的・地理的、環境的などの多方面の利点のおかげで、多くの日系企業が惠州に進出している。この背景の下において、惠州学院は人材育成の面では、地域経済の発展に応じて高素質の応用型日本語の人材育成を目標としている。

日本語本科基礎段階は日本語教育活動におけるコア段階でもあり、教育改革のコア段階でもある。教師と学生の間で相互関係の形成、教育の目的、教育の目標の実現は基礎段階のカリキュラムを主要メディアとしてしなければならない。本稿は日本語能力試験 N1 成績と日本語本科基礎段階のカリキュラム成績との相関関係を考察し、目的の一つとしては側面的に日本語教育活動のコア部分を理解し、地域経済の貢献にはより良い人材育成プログラムを開発しようとする。

日本語本科基礎段階とは、大学生が入学からの第一学年と第二学年の4つの学期である。第一学年の第一学期では開設した専門コースは基礎日本語Ⅰ、日本語音声と基礎英語Ⅰの3科目で、第二学期では開設した専門コースは基礎日本語Ⅱ、日本語会話Ⅰ、日本語聴力Ⅰと基礎英語Ⅱの4科目となっている。そして、第二学年の第三学期では開設した専門コースは基礎日本語Ⅲ、日本語会話Ⅱ、日本語聴力Ⅱ、日語読解Ⅰと基礎英語Ⅲの5科目で、第四学期では開設した専門コースは基礎日本語Ⅳ、日本語会話Ⅲ、日本語作文Ⅰ、日本語読解Ⅱ、日本語聴力Ⅲと基礎英語Ⅳの6科目となっている。

表1 基礎段階における専門カリキュラム成績の統計データ

	コース	最小値	最大値	平均値	標準偏差
第一学期	基礎日本語Ⅰ	68	91	80	7.434
	日本語音声	70	92	85	6.141
	基礎英語Ⅰ	70	91	80	5.709
第二学期	基礎日本語Ⅱ	76	93	85	4.672
	日本語会話Ⅰ	70	92	87	4.950
	日本語聴力Ⅰ	78	94	86	5.156
	基礎英語Ⅱ	73	93	84	4.485
第三学期	基礎日本語Ⅲ	58	91	80	9.525
	日本語会話Ⅱ	73	92	86	4.292
	日本語聴力Ⅱ	50	79	64	7.421
	日本語読解Ⅰ	74	95	83	4.735
	基礎英語Ⅲ	72	93	84	5.258
第四学期	基礎日本語Ⅳ	72	99	86	6.627
	日本語会話Ⅲ	70	99	88	9.691
	日本語聴力Ⅲ	66	93	81	8.333
	日本語読解Ⅱ	67	84	75	4.784
	日本語作文Ⅰ	73	97	85	6.371
	基礎英語Ⅳ	68	90	78	5.669

基礎段階における開設した専門カリキュラムの学業成績は表1の通りである。表1によって、基礎日本語Ⅲとの日本語会話Ⅲカリキュラムの学業成績標準偏差はそれぞれ9.525、9.691であり、統計上では一般的に標準差は教育の合理性を10程度目安にして、したがって、その2つのカリキュラムの教育は合理的な傾向と見られるが、その他のカリキュラム学業成績標準偏差は4.291～8.333の間で、学業成績の差は近いとし、これより教育効果と試験自体を更に考察する必要があると考えられる。

1.2 日本語能力試験N1 成績

日本語能力試験N1は言語知識（文字、語彙、文法）、読解、聴力の3つの部分に分けられ、3つの部分の点数の範囲はそれぞれ0-60点、3つの部分が加わる総得点の範囲は0-180分、3つの部分の割合は1:1:1である。3つの部分の試験の成績点数は100点以上で、しかも各部分は最低19点となる場合、試験が合格とする。かりに合計得点で合格点に達しても、その中のいかなる部分は最低合格点に達していない場合は、すなわち不合格とする。

2013年12月に世界で日本語能力試験N1のすべての科目に受験した総人数は100,419人であった。平均値は92.9点、合格率は35.4%、標準差は28.1となっていた。惠州学院日本語専攻の11級大学生は18人がその試験に合格した。試験成績は表2に示したように、最高成績は154点、最低は100点、平均値は116.8点、標準差は15.614となっていた。

表2 18名学生の日本語能力N1試験成績分布と統計

点数	150以上	140-150	130-140	120-130	110-120	100-110	統計値	最小値	最大値	平均値	標準偏差
人数	2	0	0	4	4	8	数値	100	154	116.8	15.614

2 日本語能力試験1級の成績と日本語課程の教育の相関分析

日本語能力試験N1の成績は基礎段階における専門カリキュラムの成績とは何の関係があるか。基礎段階における専門カリキュラムの成績は日本語能力N1の試験の成績に影響があるか本稿では相関分析により、いくつかの役に立つ結論を出せようとする。

もっと正確に変数間の線形相関程度を説明するには、方法の一つとして相関係数を計算し相関分析を行うことができる。相関係数は変数間の相関程度を測定する定量数値である。統計学では、一般的にサンプル相関係数 r を用いて全体の相関係数を推定する。

相関係数の範囲は $[-1, +1]$ 、すなわち $-1 \leq r \leq +1$ の値で定義される。

変数間の線形相関程度を説明する場合、目安として、以下のように判断できる。

- ・ $|r| \geq 0.8$ の場合、強い相関がある
- ・ $0.5 \leq |r| < 0.8$ の場合、中程度の相関がある
- ・ $0.3 \leq |r| < 0.5$ の場合、弱い相関がある
- ・ $|r| < 0.3$ の場合、ほとんど相関がない。

5%水準で有意→*

1%水準で有意→**

SPSS17.0 統計分析ソフトを用い、惠州学院日本語専攻 11 級 18 人の学生の日本語能力試験 N1 の成績と基礎段階における開設した専門カリキュラムの学業成績との相関分析は次の通りである。

表 3 に示すのは基礎段階における第一学年第一学期の日本語専門カリキュラムの学業成績と日本語能力試験 N1 の成績を SPSS による相関統計分析の結果である。表 3 に示したように、第一学期のコースの中で、基礎日本語Ⅰ、日本語音声、基礎英語カリキュラムの学業成績と日本語能力試験 N1 の成績は有意な相関は示さなかった。

表 3 第一学期日本語能力試験 N1 成績の相関性

		基礎日本語Ⅰ	日本語音声	基礎英語Ⅰ
日本語能力試験 N1 成績	r	-.064	.225	-.222
	sig.	.801	.369	.377
	N	18	18	18

表 4 に示すのは基礎段階における第二学期の日本語専門カリキュラムの学業成績と日本語能力試験 N1 成績を SPSS による相関統計分析の結果である。表 4 に示したように、第二学期のコースの中で、基礎日本語Ⅱ、日本語会話Ⅰ、日本語聴力Ⅰと基礎英語Ⅱは日本語能力試験 N1 の成績とは第一学期と同様に有意な相関は示さなかった。

表 4 第二学期日本語能力試験 1 級成績の相関性

		基礎日本語Ⅱ	日本語会話Ⅰ	日本語聴力Ⅰ	基礎英語Ⅱ
日本語能力試験 N1 成績	r	.451	.295	.224	.405
	sig.	.060	.235	.372	.096
	N	18	18	18	18

表 5 に示すのは基礎段階における第三学期の日本語専門カリキュラムの学業成績と日本語能力試験 N1 成績を SPSS による相関統計分析の結果である。表 5 に示したように、第三学期のコースの中で、日本語聴力Ⅱと基礎英語Ⅲの 2 科目の学業成績のみが日本語能力試験 N1 の成績と有意な相関を示している。相関係数は、それぞれ 0.681、0.521 となっている。しかも日本語聴力Ⅱの Sig (P) = 0.002 < 0.01、基礎

表 5 第三学期日本語能力試験 1 級成績の相関性

		基礎日本語Ⅲ	日本語会話Ⅱ	日本語聴力Ⅱ	日本語読解Ⅰ	基礎英語Ⅲ
日本語能力試験 1 級成績	r	.270	.003	.681**	.439	.521*
	sig.	.278	.990	.002	.068	.027
	N	18	18	18	18	18

英語Ⅲの Sig (P) =0.027<0.05 であった。それにより、日本語聴力Ⅱ、基礎日本語Ⅲカリキュラムの学業成績と日本語能力試験 N1 の成績が顕著な相関関係、しかも正相関を示している。

表 6 に示すのは基礎段階における第四学期の日本語専門カリキュラムの学業成績と日本語能力試験 N1 の成績を SPSS による相関分析の結果である。表 6 に示したように、第四学期のコースの中で、日本語読解Ⅱと日本語作文Ⅰの 2 科目を除いて、日本語聴力Ⅲ、日本語会話Ⅲ、基礎英語Ⅳ、基礎日本語Ⅳの 4 科目の学業成績は日本語能力試験 N1 の成績有意な相関を示している。相関関係はそれぞれ 0.618、0.574、0.529 と 0.482 となっている。日本語聴力Ⅲの Sig (P) =0.006<0.01、日本語会話Ⅲの Sig (P) =0.013<0.05、基礎英語Ⅳの Sig (P) =0.024<0.05、基礎日本語Ⅳの Sig (P) =0.043<0.05 である。それにより、日本語聴力Ⅲ、日本語会話Ⅲ、基礎英語Ⅳと基礎日本語Ⅳカリキュラムの 4 科目は日本語能力試験 N1 の成績が有意な相関関係を示している。そのなか、基礎日本語Ⅳカリキュラムを除いて、他の 3 科目は日本語能力試験 N1 の成績と中程度の相関関係を、しかも正相関を示している。

表 6 第四学期日本語能力試験 1 級成績の相関性

	基礎日本語Ⅳ	日本語会話Ⅲ	日本語聴力Ⅲ	日本語読解Ⅱ	日本語作文Ⅰ	基礎英語Ⅳ
r	.482*	.574*	.618**	.276	.458	.529*
日本語能力試験 1 級成績 sig.	.043	.013	.006	.268	.056	.024
N	18	18	18	18	18	18

3 分析と討論

本稿は惠州学院日本語専攻が 2011 年入学した大学生を対象に、2013 年 12 月の日本語能力試験 N1 に参加し合格した 18 人の学生の成績と基礎段階における第一学期から第四学期専門カリキュラムの学業成績を集計し分析した結果は、2013 年 12 月日本語能力試験 N1 に受験した成績については、18 人の学生の成績の最小値は 100 点、最大値は 154 点、平均値は 116.8 点、標準差は 15.614 となっている。18 名の学生の成績が自身の標準差 15.614 のみを見ると、18 人の学生間の成績の格差が大きい。

基礎段階における日本語専門カリキュラムは日本語能力試験 N1 成績の相関については、第一学期と第二学期のすべての科目は日本語能力試験 N1 の成績との有意な相関を示さなかった。第三学期の日本語聴力Ⅱ、基礎英語Ⅲ、第四学期の日本語読解Ⅲ、日本語会話Ⅲ、基礎英語Ⅳと基礎日本語Ⅳカリキュラムは日本語能力試験 N1 の成績との有意な相関を示している。そのなか、第 4 学期の基礎日本語Ⅳを除いて、第三学期の日本語聴力Ⅱ、基礎英語Ⅲ、第 4 学期の日本語読解Ⅲ、日本語会話Ⅲと基礎英語Ⅳカリキュラムは日本語能力試験 N1 と有意な相関を、中程度の相関関係を示している。しかも正相関関係を呈している。

上述の分析によって、基礎段階における大学生の日本語能力試験 N1 の成績は、個人間に大きな差が見られ、そして、日本語能力試験 N1 の成績は基礎段階における第二学年の一部分の日本語専門カリキュラムとの相関を示していることがわかった。したがって、新しい形式の日本語能力試験 1 級について、学生の個人差によって、教学方法を確立すべきである。また、日本語専門カリキュラムの面では、教育効果と試験改革を重視して、しかも、第一学年に学生に日本語の言語の基礎知識をしっかりとさせ、日本語聴力能力、日本語読解の基本技能と日本語言語の統合運用能力を身につけさせ、英語学習のいくつかの方法を参

考にしながら、特に日本語音声カリキュラムの基礎科目について、早めに独立の発音と正しい発音能力ヲ育成し、日本語聴解授業と日本語読解カリキュラムについて、情景材料、文化背景、心理の要素と聴解・読解の習慣などのいくつかの方面のボトムアップとトップダウンのモードをさらに高め、訓練することが示唆されている。

参考文献

- [1]日本語能力試験 JLPT[OL].<http://www.jlpt.jp/statistica/archive.html> , 2014-09-01.
- [2]陳要勤, 張積家, 王悦. 認知风格对日本語学習者口語能力的影響[J]. 日本語學習与研究, 2013, (1):139—141.
- [3]秦晓晴. 外国語教学研究中的定量数据分析[M]. 武漢: 华中科技大学出版社, 2011.
- [4]張爱. 日本語听说技能培养的实证研究[J]. 日本語學習与研究, 2010, (4): 112-117.
- [5]李冬梅, 唐人. 影响大学生英語成績主要因素的相關性研究[J]. 怀化学院学报, 2010, (29):135-137.

Students of the Japanese language proficiency test scores and Japanese language Analysis of relationship of it in education and in the course of study at work

*HuiZhou University Chen suling**

HuiZhou University Kang chuanjin

HuiZhou University guo yaqing

JLPT(Japanese Language Proficiency Test)is an Language proficiency exam to test some people whose native language is not Japanese. JLPT is the largest Japanese exam in the world. In order to meet the needs of social diversity, AIEJ and JAFSA began to carry out the new Japanese language test from July 2010. The new Japanese language focuses more on the application ability of language than the knowledge of Japanese.

According to our research on some students who are major in Japanese of Huizhou University, we can found out many questions. The biggest question is some students have passed the JPLT-1 but their practical ability of using Japanese is very limited. Nevertheless, some of them still understood the real meaning of Japanese learning. Given the problems above, this article takes the student who is major in Japanese in grade II of Huizhou University as object, explore the correlation between the result of JLPT and basic courses in professional teaching. According to the statistic analysis, we discuss the core of Japanese teaching , and intend to find out the main factors so that the teacher can build a teaching mode which is reasonable as well as adaptable to the new situation changes.

Keywords: *Japanese language proficiency test scores Japanese Language Education Curriculum
Correlation relationship*

*Chen suling :College student , Foreign Language Departm ent of huizhou university ,Guangdong china
Kangchuanjin :Teacher , Foreign Language Departm ent of huizhou university ,Guangdong china
Guoyaqing:Teacher , Foreign Language Departm ent of huizhou university ,Guangdong china*

